

『異邦人』の「小柄な機械人形」について

松 本 陽 正

A propos de «la petite automate» de *L'Étranger*

Yosei MATSUMOTO

Résumé

L'épisode de «la petite automate» dans *L'Étranger* n'est ni celui qui conduira Meursault au crime ni celui que l'on reprendra au procès pour mener notre héros à l'échafaud. Alors cet épisode gratuit, comment pourrait-on l'interpréter? Quelle signification ajoute-t-il au roman?

«La petite automate», apparue soudain chez Céleste dans la première partie, présente un «aspect mécanique», «pantomime privée de sens» (*Le Mythe de Sisyphe*) et nous fait éprouver ainsi le sentiment de l'absurdité. De plus, cette femme atténue la bizarrerie de Meursault par le fait que Meursault lui-même la qualifie de bizarre; ce qui est nécessaire pour amener les lecteurs à éprouver de la sympathie pour le héros.

Mais pourquoi réapparaît-elle dans la deuxième partie? Nos interprétations sur sa réapparition au procès sont les suivantes.

- (a) Pour comprendre que la femme assise à côté de Céleste au procès est bien «la petite automate», on est obligé de lire soigneusement le roman. Donc, l'auteur nous invite à une lecture attentive en la faisant réapparaître.
- (b) La raison de sa présence à côté de Céleste restera toujours énigmatique et nous fait réaliser que le monde familier de Meursault aurait changé à son insu: en un mot, sa présence nous fait éprouver le sentiment de l'absurdité.
- (c) Durant le procès, Meursault est regardé par «la petite automate»; ce qui contraste avec la première partie où Meursault la regardait. Ce contraste d'attitudes contribue ainsi à la structure artistique de cette œuvre qui est caractérisée par une opposition entre deux parties.

プレイヤッド版による Albert CAMUS の作品を次のように略記する。

Pl. I : *Théâtre, Récits, Nouvelles*, Gallimard, 1967.

Pl. II : *Essais*, Gallimard, 1965.

なお, CAMUS の作品の邦訳は、『異邦人』については『異邦人』(窪田啓作訳, 新潮文庫)から, その他の作品については『カミュ全集』全十巻(新潮社)からほとんどそのままの形で借用したことをお断りしておく。また, 『異邦人』からの引用については, ページを示したが, それらはすべて Pl. I のページをさしている。

1. 序
2. 登場の意味 (I部5章)
3. 再登場の意味 (II部3・4章)
4. 結語

1

『異邦人』 *L'Etranger* を読むと、いつも不思議に思うことがある。それは「小柄な機械人形」 *la petite automate* (p. 1187) という一登場人物に関するものである。なぜカミュはこのエピソードを挿入したのだろうか、この奇妙な人物は一体何を表しているのだろうか、そんな疑問がいつも湧きおこる。

『異邦人』はプレイヤード版では80ページになるが、「小柄な機械人形」に関するくだりは全部あわせても2ページに満たない。したがって、この一風変わった人物に照準を合わせた論文がこれまでたった一編しかなかったとしても不思議はない。ただ、示唆にも富むが、ジャン・ガッサンのこの論¹⁾には、精神分析的な飛躍が感じられるのである²⁾。

また、すでにおびただしい数にのぼる研究書の中で、「小柄な機械人形」に触れているものも少なくない。が、解釈は多岐にわたり、いまだ定説といったものがえられてはいないのが現状である。

本稿の目的は、『異邦人』の一登場人物「小柄な機械人形」に焦点を絞り、従来の解釈をふまえつつ、新たな見方を提出することにある。

『異邦人』刊行後いちはやくその世界を照射したものとして名高い「『異邦人』解説」の結末近く、サルトルはこの小説の綿密な構成を次のように要約している。

Il n'est pas un détail inutile, pas un qui ne soit repris par la suite et versé au débat; et, le livre fermé, nous comprenons qu'il ne pouvait pas commencer autrement, qu'il ne pouvait pas avoir une autre fin: dans ce monde qu'on veut nous donner comme ab-

1) Jean GASSIN, *A propos de la femme (automate) de L'Etranger*, in *Cahiers Albert Camus* 5, Gallimard, 1985, pp. 77-90.

2) 入念にラジオのプログラムに印をつける「小柄な機械人形」の行為に、『戒嚴令』 *L'Etat de Siège* の女秘書やカリギュラさらにはタルーの父の行為との類似性を見、「小柄な機械人形」は「死」や「死者」なお具体的には「ギロチン」の擬人化だと説いている。

surde et dont on a soigneusement extirpé la causalité, le plus petit incident a du poids; il n'en est pas un qui ne contribue à conduire le héros vers le crime et vers l'exécution capitale³⁾. (C'est nous qui soulignons.)

無用な細部は何一つなく、続く部分でふたたびとり上げられず、討論に注ぎこまれぬものは一つもない。そして、本を閉じると、われわれは、物語は違ったふうにははじめられなかったこと、また、別の結末に到り得なかったことを理解する。つまり、念入りに因果性を除去して、われわれに不条理として与えようとするこの世界においては、どんな小さな出来事も相応の重みをもつ。主人公を犯罪と斬首刑へと導くことに貢献しないものは何もない。(強調筆者)

事実、レエモンの手紙の代筆の受諾に始まる一連の出来事が主人公を否認なしに「犯罪」へと導いていくし、また、通夜・埋葬およびその翌日のさして意味があるとも思えなかった出来事、すなわち、母の柩を前にしてカフェオレを飲み煙草を吸ったこと、眠ったこと、涙を流さなかったこと、母の年を知らなかったこと、そしてマリーと一緒に泳ぎ、フェルナンデルの映画をみ、寝たことが、裁判の過程で「ふたたびとり上げられ」、意味づけが行われ、まったく違ったふう解釈され、主人公を「斬首刑へと導くことに貢献」することとなる。このように、下線を付した上記引用文中のサルトルの言葉は、簡潔に、鋭く作品世界の特質を指摘している。

だが、これはもちろんサルトル一流のレトリックであり、意図的に単純化した断定であって、すべての細部が「犯罪」と「斬首刑」につながっていくわけではない。作品世界を豊饒なものとするために、「犯罪」や「斬首刑」とは無関係なさまざまな肉付けが当然のことながらほどこされている。たとえば、退屈な日曜日の描写(2章)、エマニュエルとトラックに飛びのる場面(3章)、社長のもちかける栄転話(5章)、恋愛や結婚をめぐるマリーとの話(4章・5章)、サラマノ老人と犬(3章・4章・5章)といったI部にみられるエピソードは、「犯罪」には結びついていかないし、裁判で「ふたたびとり上げられ」主人公を「斬首刑」に導く性質のものでもない。それらのエピソードは主人公の性格や考え方を我々読者に知らすためのものと言えるだろう。

「小柄な機械人形」をめぐるエピソードも、この小説の筋の要約には盛り込まれぬエピソード、つまり、「犯罪」とも「斬首刑」とも無関係なエピソードの一つと考えることができる。では、「小柄な機械人形」の登場には具体的にどんな意味があり、またそれは主人公のどのような側面を明らかにしているのだろうか? 検討に入ろう。

3) Jean-Paul SARTRE, *Explication de (L'Étranger)*, in *Situations, I*, Gallimard, 1947, pp. 120-121. 邦訳、窪田啓作訳、『『異邦人』解説』, in 『シチュアションI』, 人文書院, 1972, p. 99.

2

「小柄な機械人形」はI部5章にはじめて登場する。かなり長いパラグラフだが、引用してみよう。

[引用1]

J'ai dîné chez Céleste. J'avais déjà commencé à manger lorsqu'il est entré une bizarre petite femme qui m'a demandé si elle pouvait s'asseoir à ma table. Naturellement, elle le pouvait. Elle avait des gestes saccadés et des yeux brillants dans une petite figure de pomme. Elle s'est débarrassée de sa jaquette, s'est assise et a consulté fiévreusement la carte. Elle a appelé Céleste et a commandé immédiatement tous ses plats d'une voix à la fois précise et précipitée. En attendant les hors-d'œuvre, elle a ouvert son sac, en a sorti un petit carré de papier et un crayon, a fait d'avance l'addition, puis a tiré d'un gousset, augmentée du pourboire, la somme exacte qu'elle a placée devant elle. A ce moment, on lui a apporté des hors-d'œuvre qu'elle a engloutis à toute vitesse. En attendant le plat suivant, elle a encore sorti de son sac un crayon bleu et un magazine qui donnait les programmes radiophoniques de la semaine. Avec beaucoup de soin, elle a coché une à une presque toutes les émissions. Comme le magazine avait une douzaine de pages, elle a continué ce travail méticuleusement pendant tout le repas. J'avais déjà fini qu'elle cochant encore avec la même application. Puis elle s'est levée, a remis sa jaquette avec les mêmes gestes précis d'automate et elle est partie. Comme je n'avais rien à faire, je suis sorti aussi et je l'ai suivie un moment. Elle s'était placée sur la bordure du trottoir et avec une vitesse et une sûreté incroyables, elle suivait son chemin sans dévier et sans se retourner. J'ai fini par la perdre de vue et par revenir sur mes pas. J'ai pensé qu'elle était bizarre, mais je l'ai oubliée assez vite. (p. 1157. C'est nous qui soulignons.)

私はセレストのところで晩飯をたべた。既に食べはじめていると、小柄の変わった女が入って来て、私のテーブルにすわってもいいかときいた。もちろん、差支えない。その仕ぐさはひどくせかせかしていて、小さな林檎りんごみたいな顔に、きらきらした眼が光る。女はジャケットを脱いで、椅子につくと、熱にのぼせたように品書を調べ、セレストを呼びつけて、即座に、はっきりしているがあわたましい声で、自分の料理を一どきに注文した。前

葉の来ないうちに、ハンドバッグを開いて、四角の紙片と鉛筆とをとりだし、あらかじめ足し算を行ない、それから、ポケットから、チップを加えた正確な金額を引き出して、目の前に積んだ。このとき、前菜が運ばれて来たので、女は大いそぎでそれをのみこんだ。次の皿を待つうちに、またハンドバッグから青鉛筆と今週のラジオのプログラムの載っている絵入り雑誌とをとり出し、細心の注意をもって、一つ一つほとんどすべての放送に印をつけた。絵入り雑誌は十二ページほどあったから、食事のあいだじゅう、女は念入りに、この仕事をつづけていた。私が食事を終えても、女はなお同じ熱心さで印をつけていた。やがて、女は立ち上がると、同じように、ほとんど機械的な正確さで、ふたたびジャケットを着て、出て行った。何もすることがなかったから、私もまた外へ出てしばらく女の跡を追った。女は歩道の縁の石畳に立ち、ほとんど信じがたいほどの速さと確実さで、自分の道を外れもせず、振り向きもせず歩いていた。その姿を見失ってしまうと、私はもと来た道に戻った。あれは風変わりな女だと考えたが、じきに忘れてしまった。(強調筆者)

この「小柄な機械人形」の登場には、二つの目的があると考えられる。

一つは、意味を失った人間の動作の提示であり、それを目にするルソーに、ひいては読者に不条理な感情を覚えさす点にある。

「小柄な機械人形」は寸時を惜しんでラジオのプログラムの載っている雑誌に印をつける。だが、ほとんどすべての放送に機械的に印をつける彼女の行為には何の意味もない。時間に追いたてられ、機械的に物事を処理するよう習慣づけられた現代人のカリカチュアをみるようだ。つまり、この部分は、『異邦人』の「正確な注釈⁴⁾」とされる『シーシュポスの神話』*Le Mythe de Sisyphe* の次の記述と照応しているのである⁵⁾。

Les hommes aussi secrètement de l'inhumain. Dans certaines heures de lucidité, l'aspect mécanique de leurs gestes, leur pantomime privée de sens rend stupide tout ce qui les entoure. Un homme parle au téléphone derrière une cloison vitrée; on ne l'entend pas, mais on voit sa mimique sans portée: on se demande pourquoi il vit. Ce malaise devant l'inhumanité de l'homme même, cette incalculable chute devant l'image de ce que nous sommes, cette «nausée» comme l'appelle un auteur de nos jours, c'est aussi

4) *Ibid.*, p. 100.

5) 同様の解釈は、Carl A. VIGGIANI や Jean OUDART が示している。C. A. VIGGIANI, *L'Etranger de Camus*, in *Configuration critique d'Albert Camus I*, Lettres Modernes, 1961, pp. 124-125, および J. OUDART, *Albert Camus L'Etranger*, Bordas, 1984, p. 63 参照。

l'absurde⁶⁾. (C'est nous qui soulignons.)

人間もまた非人間的なものを分泌するのだ。すべてが明晰に見えてくるようなとき、人間たちの動作の機械仕掛じみた外観、つまり人間たちの意味を失ったパントマイムが、かれらを取り巻くいっさいを愚かしいものに化してしまう。ガラスのはまった仕切りの向うで、ひとりの男が電話をかけている。その声は聞えない、身振りは見えるが、それには意味を伝えてくる力はすこしもない。すると、その男は何のために生きているのだろうかという疑問が湧いてくる。人間自体にある非人間性をまえにしたときのこの不快感、ぼくらのあるがままの姿を見せつけられたときのこの測りしれぬ転落、現代のある作家の言葉を借りていけば、この「嘔吐感」^{おとと}、これもまた不条理なものである。(強調筆者)

いまひとつの目的は、読者のムルソーに対する考えを軌道修正する点にある。

I部5章には、直接的に事件とかかわり、裁判で問題とされるような事柄はほとんど述べられてはいない⁷⁾。したがって、この章はムルソーの性格を我々読者に紹介するための章と考えられる。〔引用1〕の前では、結婚に関する考えをマリーから求められ、さらにその前では、社長から栄転話をもちかけられるのだが、いずれの場合にも「無関心な言葉づかい⁸⁾」によるムルソーの返答は、常識を超えたものとして映り、彼が「ただ昇進とか結婚とかいった因襲的な目的にたいして無関心であるにすぎない⁹⁾」ことが相手にはわからない。マリーはムルソーに「あなたは変わっている」bizarre (p. 1156) と言うが、マリーと同じ印象をもつ読者も多いはずである。マリーに、あるいは読者に「変わっている」と思われたムルソーが、「変わった」bizarre、「風変わりな」bizarre と感じ¹⁰⁾、実際読者も同じ印象をもたざるをえない「小柄な機械人形」の登場によって、ムルソーの奇矯さは緩和され、今度はムルソーが常識の、一般の線にひきもどされてくる¹¹⁾。さらに、この後のパラグラフで、犬に逃げられたサラマン老人に親切にする主人公の姿を描くことで、ムルソーが「変わっている」という印象は一層弱められ

6) Pl. II, p. 108.

7) 「犯罪」と関係があるといえるのは、レエモンからの電話内容を述べた最初の二つの短いパラグラフだけであるし、裁判の過程で検事側から問題にされるようなことは何もない。

8) Pierre-Georges CASTEX, *Albert Camus et L'Étranger*, José Corti, 1965, p. 111.

9) アデル・キング、『カミュ論』、大久保敏彦訳、清水弘文堂、1973、p. 92.

10) 訳語は使われているが、原文ではすべて同じ語 bizarre が使用されている。

11) Briant T. FITCH や Bernard PINGAUD は、逆に、ムルソーの性格や視線が bizarre だから「小柄な機械人形」を bizarre と感じたのだと説く。引用しておく。[...]le fait de trouver tant de choses bizarres peut paradoxalement témoigner plutôt d'un caractère bizarre chez lui, d'une distance psychologique qui le sépare de ce qui l'entoure. (B. T. FITCH, *L'Étranger d'Albert Camus*, Larousse, 1972, p. 97.) Le person-

(次頁へつづく)

てしまうのである。事実、ムルソーは自分が「変わっている」とは思っていないし¹²⁾、みんなと同じ人間だと思っているのである¹³⁾。

実際に殺人を犯した一人の男の無垢を保証し、読者の共感をえ、その男を「我々が値する唯一のキリスト¹⁴⁾」とするには、いくつかの困難な要請があったはずだが¹⁵⁾、主人公はあまり突飛な存在であってはならない、というのもその一つであったはずである。そういう意味から、主人公を普通の人間のレベルにひきもどす上で、「小柄な機械人形」のエピソードはきわめて有効だったといえるだろう。

3

「小柄な機械人形」は、Ⅱ部3章および4章の裁判に再び登場してくる。だが、すでにみたⅠ部5章の場面に比べると、裁判での再登場はいままで問題とされることがあまりなかった。にもかかわらず、Ⅱ部での再登場という事実一つとっても、そこに重大な意味が隠されていることは間違いない。というのも、マリー、レエモンなどⅠ部で重要な役割を演じた登場人物たちはみな、裁判に証人として喚問され、Ⅱ部にも登場するのであるが、「小柄な機械人形」は、主人公ムルソーを別にすれば、証人としてでなくⅡ部にも登場する唯一の人物という特殊性を備えているからである。証人としてでないとするれば、なぜカミュは「小柄な機械人形」を再登

nage de l'«automate» trouve ici son utilité. Il re-présente la «mécanique» dans le récit, et ce n'est pas pour rien que Meursault qualifie cette femme de «bizarre». Il veut ainsi — pour le cas où le lecteur n'aurait pas compris — désigner son propre regard comme bizarre. (B. PINGAUD, *L'Étranger de Camus*, Hachette, 1973, p. 59.) また、C. A. VIGGIANI は、bizarre というまったく同じ語で形容された「小柄な機械人形」にムルソーの「分身」をみる。Ce mot (=bizarre) se retrouve à deux ou trois reprises dans le roman: la première fois, dans la bouche de Marie à propos de Meursault, deux pages avant que ne paraisse la petite automate. Chez un auteur aussi scrupuleux que Camus, cela dénote probablement une intention précise: faire de la petite automate un double et un reflet de Meursault. (C. A. VIGGIANI, *op. cit.*, p. 125.)

12) Robert CHAMPIGNY は次のように指摘している。

Il ne se sent pas bizarre, excentrique. Il trouve «bizarre» une femme qu'il a observée dans un restaurant. C'est que lui-même se considère comme appartenant à la masse des gens normaux. (R. CHAMPIGNY, *Sur un héros païen*, Gallimard, 1959, p. 23.)

13) J'avais le désir de lui affirmer que j'étais comme tout le monde, absolument comme tout le monde. (p. 1173)

14) Pl. I, p. 1929. 『アメリカ大学版への序文』*Préface à l'édition universitaire américaine*にある CAMUS 自身の言葉。

15) 拙稿、『『異邦人』における太陽の image』、『広島女学院大学論集』、通巻35集、1985、pp. 234-235 参照。

場させたのだろうか？そこにはいかなる内的必然性があったのだろうか？

こうした問題を考えるために、まず、登場するすべての場面を引用してみよう。

[引用 2]

Je m'étonnais encore de ne pas les avoir aperçus plus tôt, lorsque à l'appel de son nom, le dernier, Céleste s'est levé. J'ai reconnu à côté de lui la petite bonne femme du restaurant avec sa jaquette et son air précis et décidé. Elle me regardait avec intensité. Mais je n'ai pas eu le temps de réfléchir parce que le président a pris la parole. (p. 1187. C'est nous qui soulignons.)

私はそれまでの連中に気がつかなかったことに驚いていた。そのとき、最後に、名前を呼び上げられて、セレストが立った。彼のそばに、いつかレストランにいた小柄な女が、覚えのあるジャケットを着て、例の正確で断固たる態度で控えているのが見えた。彼女は食い入るように私をながめていた。が、裁判長がまたしゃべり出したので、私は考える暇がなかった。(強調筆者)

[引用 3]

Je sentais les regards du plus jeune d'entre eux (=les journalistes) et de la petite automate. (p. 1187. C'est nous qui soulignons.)

記者のなかの年若の青年と、例の小柄な機械人形の視線を、私は感じていた。(強調筆者)

[引用 4]

Le jeune journaliste et la petite femme étaient toujours là. Mais ils ne s'éventaient pas et me regardaient encore sans rien dire. (p. 1188. C'est nous qui soulignons.)

若い記者も、小柄な女も、相変わらずそこにいた。しかし、その二人だけはうちわを使わず、相変わらずものもいわずに私を見つめていた。(強調筆者)

[引用 5]

Tout était dans le même état que le premier jour. J'ai rencontré le regard du journaliste à la veste grise et de la femme automate. (p. 1200. C'est nous qui soulignons.)

すべて第一日と同じすがただった。私は灰色の背広を着た新聞記者と、機械人形みたいな女の視線に出会った。(強調筆者)

このうちの [引用 2] [引用 3] [引用 4] は 3 章に, [引用 5] は 4 章にでてくる。

まず気をつけることは呼び方が一つとして同じではないということだ¹⁶⁾。本稿では, 便宜上, 「小柄な機械人形」la petite automate に統一したが, 「いつかレストランにいた小柄な女」la petite bonne femme du restaurant ([引用 2]), 「小柄な機械人形」la petite automate ([引用 3]), 「小柄な女」la petite femme ([引用 4]), 「機械人形みたいな女」la femme automate ([引用 5]) といったふうに各々の場面での名称が異なっている。これは一体どのような効果をねらったものだろうか? まずこの点の検討から始めたい。

[引用 2] をもう一度見ていただきたい。セレストの隣にいる女性は一体何者なのだろうか? この女性が [引用 1] のセレストの店でみかけた「風変わりな女」と同一人物だと気付くにはかなり注意深い読書が要求される。なぜなら, すでにみたように「小柄な機械人形」が登場した [引用 1] は「犯罪」とも「斬首刑」とも無関係な, 短い¹⁷⁾ エピソードにすぎなかったし, 「小柄な機械人形」のことは主人公ムルソーが「じきに忘れてしまった」としていたからである。

ただ, 注意深く読めば, [引用 1] と [引用 2] にはいくつか共通の言葉がはめこまれていて, それらの言葉によって同一人物であることが示されていることがわかる。

まず, 「セレスト」と「レストラン」が具体的な状況を喚起し, 記憶を甦らせてくれるし, 問題の女性を描写する上で用いられている言葉について言えば, [引用 2] の下線をひいた語のうちで, 「小柄な」petite とそれに修飾された「女」femme は [引用 1] の petite femme と一致している。また, 上着は相変わらず「ジャケット」jaquette だし, 動作を特徴づける形容詞も précis (「正確な」) で, これらの言葉は [引用 1] で二度使われていたものだ。

こうしたことから, [引用 1] の女性と [引用 2] の女性が同一人物だと断定できるのだが, 興味深いことは, すでに指摘したように, 他の部分でも, まったく同じ語が繰り返されているわけではないということである。だが, よくみると, 「小柄な」petite, 「機械人形 (みたいな)」automate¹⁸⁾, 「女」femme という三つの言葉を, 二語ずつ組み合わせ, 各々二回ずつ使われていることがわかる。すなわち, [引用 3] では「小柄な機械人形」la petite automate, [引用 4] では「小柄な女」la petite femme, [引用 5] では「機械人形みたいな女」la femme automate としているのである。

16) J. GASSIN は (automate) という語に着目し, 次のように指摘する。(ただし, 彼の依拠するプレイヤッド版は1962年度版) A sa première apparition, p. 1155, le personnage a seulement des (gestes [...] d'automate). Il deviendra p. 1185 (la petite automate), p. 1198 la (femme automate) et, p. 1209, (la petite femme automatique). (J. GASSIN, *op. cit.*, p. 77.)

17) プレイヤッド版ではわずか1ページにもみたくない。

18) この語も [引用 1] に出ていたものである。

さらに言えば、最終章、ムルソーが司祭に向かって反抗の叫びをあげる場面でも、「小柄な機械人形」に関して言及がなされているが、そこでは「機械人形みたいな小柄な女」la petite femme automatique (p. 1211) となっていて、これまた他の場面とは表現を異にしている。

こうした名称の微妙な変更には¹⁹⁾、同じ語の繰り返しによる単調さの回避といった意味あいももちろんあろうが、それによってカミュはなによりも読者の注意を喚起しているのではないだろうか？ すなわち、自らの作品理解の上で、どんな細部も、どんな言葉もおろそかにせぬ、注意深い読書を読者に求めているように思われるのである。

それでは、Ⅱ部3章に出てくる女性がⅠ部5章に出ていた「小柄な機械人形」だとわかったとして、そのことでどういった意味が生じてくるのだろうか？

〔引用2〕をもう一度みていただきたい。ここで注目してほしいのは、彼女がセレストの隣にすわっているということだ。これは単なる偶然だろうか？ そうでないとしたら、この一年近くのあいだに彼女はセレストの店の常連になり²⁰⁾、誘われて一緒に来たのだろうか？ それとも、もしかしたらセレストの愛人にでもなってしまったのだろうか？ あるいは妻に²¹⁾？

こんな問いをムルソー自身は発しはしない。なぜなら、「裁判長がまたしゃべり出したので」彼にはそんなことを「考える暇がなかった」のだから。しかしながら、「考える暇がなかった」というこの言葉から、セレストの隣に「小柄な機械人形」がいるということはムルソーにとっても一考を要する事柄、つまり未知の事柄だったことがわかるのである。

したがって、当然、我々読者にはいろんな疑問が湧いてくる。単なる偶然かもしれない。しかし、そうでないとしたら、ムルソーの知らないあいだに、かつて彼自身が慣れ親しんだ小世界に何らかの変化が起ったことが、セレストの隣の「小柄な機械人形」によって暗示されていることになる。自己が慣れ親しんだ世界も決してそのままではありえないこと、自己の知らないあいだに、自己とは無関係に世界が相貌を変えていくこと、そんなことをセレストの隣にいる「小柄な機械人形」は告げているようだ。したがって、彼女が突然再登場するのを目のあた

19) たとえば、引用文からもわかるように「若い記者」の呼び方も微妙に違うし、また「陪審員たち」を「電車の座席」(p. 1185)にたとえた後、直接そう呼んでいるような場面もあるが(p. 1187)、Ⅰ部・Ⅱ部にまたがって登場する「小柄な機械人形」に比べれば、いずれも容易に読みとれるものばかりである。

20) ムルソーがセレストの店の常連だったことは、セレストの証言を待つまでもなく、たとえば《comme d'habitude》や《ils》(「みんな」といった語の使用によっても明らかだが(p. 1127, p. 1139 参照)、そんなムルソーが「小柄な機械人形」にはⅠ部5章ではじめて出会った点、およびその時彼女は「熱にのぼせたように」メニューを見たり、勘定を計算したりしていた点から、彼女はセレストの店にはおそらくこの時はじめて来たものと考えられる。

21) 「太鼓腹」に「白いひげ」(p. 1144)をはやしたセレストはかなり年配だと考えられるが、それでも彼が妻帯者が独身かは読者にはわからない。

りにして、我々は、人間の理解を超えた世界の不可解さを感じ、不条理な感覚にとらわれてしまうのである。

だが不思議なことに [引用 2] 以後は、「小柄な機械人形」がセレストの隣にいるという言葉はまったくなされなくなってしまう。以後くりかえし述べられるのは、セレストの隣にいるという事実ではなくて、彼女の投げかける視線となる。すでに [引用 2] でも、「彼女は食い入るように私をながめていた」とあったが、[引用 3] [引用 4] [引用 5] にあげたように、裁判中、ムルソーは、「小柄な機械人形」ともう一人「若い記者」の視線を感じ続けるのである²²⁾。

では、二人の視線は何を表しているのだろうか？ 先に登場する「若い記者」からまず考えていこう。

Pourtant, l'un d'entre eux (=les journalistes), beaucoup plus jeune, habillé en flanelle grise avec une cravate bleue, avait laissé son stylo devant lui et me regardait. Dans son visage un peu asymétrique, je ne voyais que ses deux yeux, très clairs, qui m'examinaient attentivement, sans rien exprimer qui fût définissable. Et j'ai eu l'impression bizarre d'être regardé par moi-même. (p. 1186. C'est nous qui soulignons.)

けれども、そのうち(=新聞記者)の一人、青いネクタイをして、灰色のフランネルの服を着た、大分若そうな青年は、万年筆を眼の前に置いたなり、私の方を見つめていた。多少不均齊なその顔のなかで、私は澄み切った両の眼しか見ていなかった。その眼はじっと私の方を食い入るように見ていたが、はっきり言葉にしうるものは何一つ表わしていなかった。そして、私はまるで自分自身の眼でながめられているような、奇妙な印象をうけた。(強調筆者)

「若い記者」については、画家が絵の中にさりげなく自画像を盛りこむように、カミュが、新聞記者の体験をふまえて、自分自身を作品中に登場させたものとする解釈が一般的である。この「若い記者」の視線を受けたムルソーは、「まるで自分自身の眼でながめられているような」、鏡を前にしたような奇妙な思いにとらわれる。だが、少なくとも文脈からは、〈分身〉の

22) はじめて入廷した時、ムルソーは陪審員の視線を感じ、法廷内にいる人が「みんな私の顔を見ようとひしめいている」(p. 1185)と思う。また、ムルソーが目やるたびにマリーは合図を送ってよこす、つまりマリーは常にムルソーを見ていたわけだが、ムルソーが意識し続けるのは、「小柄な機械人形」と「若い記者」の視線だけである。

視線に好意とか共感といったものを読みとることはできない。なぜなら、記者の眼は「はっきり言葉にしうるものは何一つ表わしていなかった」とされているからである。すなわち、ここでは、視線は視線として存在しているにすぎないのである。

つづいて、「小柄な機械人形」もムルソーを注視していることが知らされる〔引用2〕参照。その後は、「若い記者」と「小柄な機械人形」とが並列され、二人がムルソーを見つめていることが、三度にわたって繰り返す述べられることとなる〔引用3〕〔引用4〕〔引用5〕参照。ムルソーは二人の視線を意識するのだが、何を感じたか、視線をどのように感じたのか、そんな説明はここでもまったくなされてはいない。このように何の説明も加えられていない点、そして三度も二人の視線が並列されている点から、「小柄な機械人形」の視線も「若い記者」の視線同様、「はっきり言葉にしうるものは何一つ表わしていなかった」と考えられる。

だが、両者は完全には同じ視線ではありえない。両者の差異、それは、「若い記者」が〈分身〉だとすれば、「小柄な機械人形」は、逆に、象徴的に〈他者〉を示している点に求められるべきだろう。自己と他者、ムルソーはこの二つの視線を浴び続けるわけだ。繰り返すが、この視線には、「はっきり言葉にしうるものは何一つ」ない。視線はただ視線として、まるでレンズのように、対象に向けられたままである。

ここで『異邦人』の語り的手法を確認しておこう。『異邦人』は一人称小説であり、したがって我々読者は語り手ムルソーの感覚を共有することによってしか作品世界を歩むことはできない仕組みになっている。つまり、我々はムルソーの目というレンズを通して外界を眺めてきたわけである。ところで、このレンズの特徴はいかなるものだったろうか？ それは「人間の動作の意味²³⁾」は通さずに、人間を映しだしていくことではなかったか？

〔引用1〕をいま一度見ていただきたい。パラグラフの導入部と最後で「変わった女」、「風変わりな女」と例外的に感想が述べられてはいるが、その他は価値判断をいっさい交えず、「小柄な機械人形」の動作が一つ一つ正確に映しとられている。ムルソーの視線はあたかもレンズのように「小柄な機械人形」を追っている。

Ⅱ部の裁判の場面では、立場が逆転する。今度はムルソーが「小柄な機械人形」に見つめられるというわけだ。

周知のように、『異邦人』のⅠ部とⅡ部とは鮮やかな対照をなしているのだが、ムルソーと「小柄な機械人形」とが互いに投げかける視線もまたⅠ部とⅡ部とでは対照的になっており、この視線のコントラストによって、見る者から見られる者への主人公の状況の変化、すなわち、自由人から被告へのムルソーの変化が巧みに表現されているといえるだろう。

23) J.-P. SARTRE, *op. cit.*, p. 115. 邦訳, *op. cit.*, p. 95.

4

以上、『異邦人』の中で「小柄な機械人形」の果している役割をみてきたが、最後に、登場人物の名前という観点から、「小柄な機械人形」という名称の特異性に触れ、この小論を終えたい。

『異邦人』では、我々読者に名前が知らされる登場人物の数は限られている。主人公ムルソーを別にすれば、セレスト、エマニュエル、トマ・ペレ、マリー、サラマノ老人、レエモン、マソンのわずか七名にすぎない²⁴⁾。また、これら名付けられた人物は、ムルソーの周辺にいる人達にはほぼ限定されていること、したがって、全員がⅠ部に登場し、牢獄と裁判所が主要舞台となるⅡ部には、名前では呼ばれる新たな登場人物は一人もいないことをつけ加えておこう。

その他、何らかの役割を演じる二義的人物たちは、「社長」「門番」「院長」「彼の妻」(p. 1162)「予審判事」「弁護士」「検事」「司祭」といったふうに、職業や社会的身分で呼ばれている。今あげた作中人物たちの中で、「検事」と「司祭」を別にすれば、他の人物たちの名を主人公は耳にする機会があったはずだし、少なくとも、「社長」の名前は知らぬはずがない。しかし、名前は明らかにされず、職業や身分で呼ばれている。それには二つの理由が考えられよう。

一つは、よく言われることだが、職業で呼ばれることによって、個性を失った彼らが「社会のメカニズムの歯車²⁵⁾」にすぎなくなっていることが示されているのである。そこから皮肉やユーモアが生まれてくる。

今一つは、単純化への方向、簡潔さへの指向とでもいったものである。たとえば、「マソン夫人」の名をムルソーは聞いたはずだが、我々読者には彼女の名前を知る必要性はない。「彼の妻」と伝えてもらえれば、それで十分こと足りるわけである。

こうした分類におさまりきらぬものが三つある。「母」と「アラブ人」とそれに「小柄な機械人形」である。

「母」については、カミュのすべての作品において、主人公の母には名前がつけられておらず、逆にそのことによって、「唯一不変の肯定的価値²⁶⁾」が付与された存在となっている。し

24) フェルナンデルとジャンヌ(p. 1178)はムルソーが実際に目にするわけではないので含めない。また、養老院の門番はフィジャク(p. 1134)とも考えられるが、断定はできない。

25) 白井浩司、『アルペール・カミュ その光と影』、講談社、1977、p. 145.

26) 西永良成、『評伝アルペール・カミュ』、白水社、1976、p. 17.

かも、ロジェ・グルニエが言うように、『異邦人』では一般的な「母」*ma mère*ではなく、「言葉や考えや涙さえもこえて、直接結びついていると感じることのできる唯一の存在²⁷⁾」である「ママ」*maman*となっているのは注目に値しよう。

「アラブ人」についても、『追放と王国』*L'Exil et le Royaume* 中の一編『啞者』*Les Muets* のサイドを別にすれば、カミュのすべての作品で名が付けられてはいない。オブライエンはここにカミュの差別意識をみているが²⁸⁾、たとえフランス人に対してでも名前で呼ぶのを極端に避け、必要最小限の人物にしか名前をつけてはいない点から、名付けぬことでむしろ古典的な簡潔さをねらっていると考えるべきではないだろうか？

ともかく、「母」や「アラブ人」は重要なテーマであり、本稿では問題点の指摘にとどめた。

ところで、今まで論じてきた「小柄な機械人形」が、名前という観点からもいかにユニークな、例外的な存在であるか、もうおわかりいただけたのではあるまいか。つまり、彼女は、職業や身分によって呼ばれているのではなく、その名称が動作²⁹⁾に由来している唯一の人物なのである。同様の名付け方は、『ペスト』*La Peste* 中の、猫に唾を吐きかける奇妙な登場人物、「小柄な猫の老人」*le petit vieux aux chats*³⁰⁾の場合にもあてはまる。こうした人物たちによって、カミュは、『異邦人』および『ペスト』執筆時に心を占めていた「無意味なもの」*l'insignifiance* を提示しようとしたと考えられるのである³¹⁾。

[...]les actions insignifiantes trahissent toujours l'aspect mécanique des choses et des êtres, l'habitude de ce qu'ils sont³²⁾.

無意味な行動はいつでも事物やひとびとのメカニクな側面を、それらの本来の姿のうちの習慣的部分をあばきだすものだ。

すなわち、登場人物たちの「無意味な行動」によって、人間の「メカニクな側面」を、「習慣的部分」をあばきだし、読む者に、ユーモアの交った奇妙な感情を覚えさせようとしたと考え

27) Roger GRENIER, *Notice*, in *Oeuvres complètes d'Albert Camus* 7, Gallimard et Club de l'Honnête Homme, 1983, p. 108.

28) オブライエン、『カミュ』, 富士川義之訳, 新潮社, 1971 参照。

29) ここでは *petite* という体型ではなくて, *automate* という動作の方に注目すべきだろう。なぜなら, ムルソーが注意を払うのはなによりも彼女の動作であったからである。

30) Pl. I, p. 1312.

31) Roger QUILLIOT は次のように述べている。[...] ce texte (= *De l'Insignifiance*) rejoint les préoccupations qui furent les siennes au temps où il écrivait *l'Étranger* et *la Peste*. (Pl. I, p. 1902.)

32) Pl. I, p. 1906.

られるのである。つまり、カミュにとって「重要なテーマでありながら、批評家に取りあげていない」テーマ、すなわち「ユーモア³³⁾」を交えつつ、読者の心に不条理な感情を生じさせようとしたと思われるのである。「小柄な機械人形」から「小柄な猫の老人」に至る、動作によって名付けられた二義的人物の系譜が、『ペスト』以後見受けられなくなる点からも、こうした人物たちが、感覚的な不条理の提示の問題と緊密に結びついていたことがみてとれるのである。

33) *Réponses à Jean-Claude Brisville*, in Pl. II, p. 1922.